

読書週間

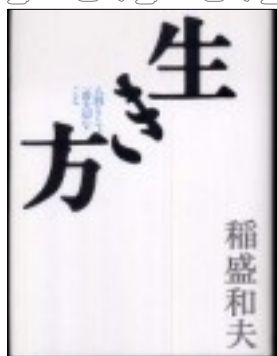
図書館だより

NOVEMBER

読書の秋

一冊の本から、なにかが変わる

秋の読書週間が始まりました。普段、なかなか本に縁遠い人も、この機会にちょっと読書の楽しみ・大切さに触れてみてはいかがでしょう？「で忙しくそんな暇がない」と言うそのあなた！時間とは人類に平等に与えられた唯一のものです。上手にやりくりして、時間を作り出すのも自分の勉強のひとつですよ。今号から、本校の先生方に推薦して頂いた本の紹介をしていきます。読んで損する本はひとつもありません。ぜひ、手にとって読んでみる事をお勧めします。

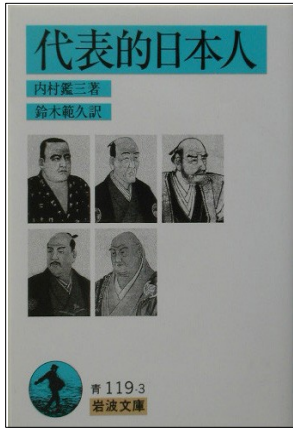


中原 昭校長
『生き方 人間として一番大切なこと』
稲盛 和夫著 サンマーク出版

「何事も好きであればこそ、燃える人間になれる。」
「大きな夢を描け、人生は飛躍する。」
「努力を積み重ねれば、凡人も非凡になる。」
「人格を磨くことを忘れるな。」
「諦めるな、善因善果、悪因悪果の法則」など人生の教訓が溢れたものです。一読あれ。

矢野 正彦教頭
『代表的日本人』
内村 鑑三著 岩波書店

明治時代に日本の文化・思想を英語で西欧社会に紹介したのが、この本です。西郷隆盛・上杉鷹山・二宮尊徳・中江藤樹・日蓮上人の5人を通して、日本人の長所、特に、徳の心を知ってもらいたいとこの本は書かれたのだと思います。全世界の貧困や経済問題を解決するのは、日本人の徳の精神しかないのではないかと強く感じた作品です。



阿部 幸子
『四季の旅 - 花のある風景 -』 森本 哲郎著 ダイヤモンド社

花の見方から始まり、各章の冒頭に蕪村の句が入り、いろいろな場所そしていろいろな話題が出てきます。また、安野光雅の装丁・版画があって心豊かにしてくれます。花の知識も豊富になり、実際その花を見てみたい...という気持ちにもなります。自然との出会いを、電子ではない紙の本をめくりながら味わうのも如何でしょうか。



斎藤 繁樹
『1995年 未了の問題圏』
中西新太郎編著 大月書店

蛙を水を入れた鍋にいれ、水の温度を徐々に上げると、蛙は茹で上がり死ぬという。人間はこの蛙を笑えるだろうか？



「一億総中流」の80年代から「格差と貧困」の現在に至る日本社会の転換を見通すことのできた人々はそう多くはあまい。本書は転換の様相を社会運動の frontline で活躍する当事者の立場から論じている。一読を乞う。

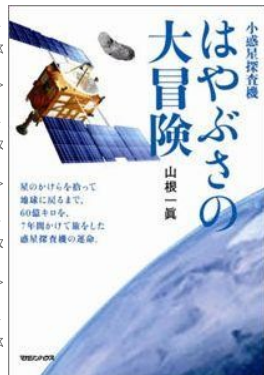
長岡 浩
『生物と無生物のあいだ』 福岡 伸一著 講談社

「生命とは何か」の完全な回答はまだでていないが、これを知らず一生を終えるのも悔しいから、このテーマの著書を読み漁っている。最近、優れた翻訳書が多くでていますが、最先端の物理学、化学、宇宙生物学の用語を駆使しないと正確に語れないらしい。上記の著書は、エッセイ風のタッチで最先端の内容を扱っており読み易い。



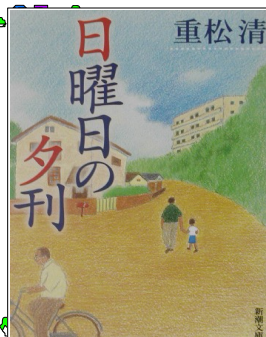
鈴木 巳代治
『小惑星探査機 はやぶさの大冒険』
山根 一眞著 マガジンハウス

日本中が感動した奇跡の帰還、7年間60億kmの旅をし、燃え尽きた「はやぶさ」の映像に涙した人は多い。あたかも人間が旅したかのように。世界初のサンプルリタンの壮大な計画、エンジン停止、通信断絶、トラブルの連続で地球帰還は絶望と思われた。決してあきらめない心、夢や希望を持つ事の大切さが伝わってくる。



河和 直人
『卒業ホームラン』 重松 清著 毎日新聞社

重松清氏の入門書として、『日曜日の夕刊』（短編集）の中の「卒業ホームラン」を紹介。息子智の立場で忘れていた純粋な心を感じて欲しいです。監督の徹夫が智を試合に出してやれない矛盾に苦しむ姿も刺激を受ける。家族みんなでホームインしよう...ちょっとした言葉で人はがんばれるんだよね...心が和む内容です。ぜひ読んでみて下さい。



裏面もみてね！

